

調査 I、II の結果から採集間もない貝殻と上層の貝殻のそれぞれの平均は 5.99 cm と 6.30 cm であり、小型の貝が漁獲されていることは事実である。昭和 56 年 3 月に沖縄県水産試験場の嘉数清次長が小浜島で採集し、提供をうけた貝殻は殻長 4.4 cm であり、八重山全体が小型個体採取の傾向にあるようである。①のシャコガイの漁獲量及び②生産額を加味して考えると漁獲サイズの小型化傾向は聞き取り調査で得た「割烹等では調理の都合で小型個体の方が喜ばれる」ということはあっても資源量の大巾減少による小型個体までの漁獲が主であろうと考えられる。

#### ④ 採貝漁業とシャコガイ漁業

統計資料では漁業種類別にみた採貝漁業はあるが、シャコガイ漁業はない。また漁種別漁獲量でシャコガイとその他の貝類でしか記録されていない。①で述べたようにシャコガイの漁獲量は大きく減少した生産額も落ちてきている。そこでシャコガイ漁業に対する依存の程度を、統計資料を用いて調べてみた。

石垣市の採貝・貝類・シャコガイの漁獲量及び生産額を表 6 に示した。

表 6. 石垣市の採貝・貝類・シャコガイの漁獲量及び生産額

調査月日	漁獲量 (トン)			生産額 (千円)			②/①	③/①	④/②	⑤/④	⑥/⑤	⑦/⑥
	①採貝漁業	②貝類	③シャコガイ	④採貝漁業	⑤貝類	⑥シャコガイ						
昭和												
48.11(現在)	156	156	156	13,299	10,920	10,920	100.0	100.0	100.0	82.1	82.1	100.0
50. 1	85	85	85	7,469	7,469	7,469	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
51. 1	179	249	213	69,084	96,662	85,070	139.1	119.0	85.5	139.9	123.1	88.0
52. 1	105	193	94	42,542	72,542	39,611	183.8	89.5	48.7	170.5	93.1	54.6
53. 1	117	142	113	44,008	-	-	121.4	96.6	79.6	-	120.2	-
53. 1	98	88	65	52,847	40,833	31,515	89.8	66.3	73.9	77.3	59.6	77.2
55. 1	137	99	52	87,061	46,743	27,562	72.3	38.0	52.5	53.7	31.7	59.0
56. 1	164	66	31	157,583	36,226	16,882	40.2	18.9	47.0	23.0	10.7	46.6
57. 1	146	54	11	-	-	-	37.0	7.5	20.4	-	-	-

(沖縄農林水産統計年報より作成)

貝類及びシャコガイの漁獲量と生産額は減少を示しているのに、採貝の漁獲量及び生産額は増加している。昭和 56 年 1 月の資料では、採貝は 164 トンの漁獲量で 157,583 千円を生産額をあげているが貝類は 66 トン(40.2%)、36,226 千円(23.0%)であり、シャコガイはそのうち 31 トン(採貝の 18.9%、貝類の 47.0%)、16,882 千円(採貝の 10.7%、貝類の 46.6%)であり、採貝に占める割合が低くなっている。しかしながら昭和 53 年頃までは採貝の漁獲量及び生産額が下まわっていることがある。これは貝類及びシャコガイが他の漁業種類でも漁獲されているためであろうと思われる。

昭和 56 年 1 月の県の漁業種類、魚種別漁獲量を調べてみると採貝漁業は 519 トンの漁獲量があり、その内魚類が 57 トンでフエフキダイ科、スズキ科、ブダイ科、ベラ科、アイゴ科の魚を漁獲しており、水産動物が 41 トンでイセエビ、甲イカ、シロイカ、タコがとられている。そして貝類が 420 トンでそのうちシャコガイが 161 トン、その他の貝類が 259 トンである。(統計では内訳と合計で 1 トンの不足がある)。他の漁業で貝類が 60 トン漁獲され、そのうちシャコガイが 22 トンとられている。22 トンのうち 5 トンは追い込み網が漁獲している。これらのシャコガイの漁獲量合計が県計の 184 トンとなっている。

石垣市の魚種別漁獲量は統計年報では掲載が省略されているので、県の採貝漁業の魚種別漁獲量と生産額を表7に示し、魚種別漁獲量比率を図7に示した。

表7. 沖縄県の採貝漁業の魚種別漁獲量と生産額

調査月日	漁獲量 (トン)	魚種別漁獲量 (トン)				生産額 (千円)
		魚類	水産動物	その他の貝類	シャコガイ	
昭和						
48年11月(現在)	469	0	0	31	438	38,480
50年1月	440	0	0	40	400	95,405
51年1月	458	0	1	38	419	180,316
52年1月	462	0	5	72	185	85,011
53年1月	365	0	71	156	138	137,290
53年11月	314	1	12	84	217	152,847
55年1月	346	23	19	144	160	186,428
56年1月	519	58	41	259	160	300,103
57年1月	507	56	41	338	72	276,619

(沖縄農林水産統計年報)

採貝漁業の魚種別漁獲量の中で水産動物が出現するのは昭和51年1月の表7の1トン、図7の0.2%からであり、魚類は昭和53年11月の表7の1トン、図7の0.3%からである。シャコガイは昭和48年11月から51年1月まで採貝漁業の90.9~93.4%の漁獲量を占めていたが、その後6年を経過した昭和57年1月の調査では14.2%にまで激減している。これは前述のシャコガイの漁獲量の推移と平行して動いていると言える。そしてその他の貝類は昭和48年11月から6.6%から66.7%に急増している。水産動物は昭和51年1月の1トン(0.2%)から昭和57年1月の41トン(8.1%)と増加している。水産動物が昭和53年1月の71トン(19.2%)と前年の5トン(1.9%)から大巾に増加した内訳はウニが65トン、この年のみに採貝でとられたためであり、他の年にはウニの漁獲は採貝ではなく主に「その他の漁業」で漁獲されている。魚類は昭和53年の1トン(0.3%)から昭和57年1月の56トン(11.0%)と増えてきている。採貝漁業の中で魚類、水産動物が出現し、増加傾向を示し始めたのとその他の貝類の比率が高くなり出したのは、おおまかには図2に示したシャコガイの漁獲量が578トンから227トン(対前年比39.3%)に大巾に減少した昭和52年1月1日現在の調査の1年前、昭和51年頃からであると言える。

県の採貝漁業に占めるその他の貝類の漁獲量の比率は昭和53年1月に42.7%(156トン)でシャコガイを抜いて第1位となり、昭和53年11月には逆転し26.8%(84トン)で第2位となった。昭和55年1月には41.6%(144トン)となりシャコガイの46.2%(160トン)に近づき、昭和56年1月で49.9%(259トン)、シャコガイは31.0%(160トン)でまた第1位となり、昭和57年1月には66.7%(338トン)で、シャコガイの14.2%(72トン)を大きくひき離れた。その他の貝類とは、タカセ貝、夜光貝を主としてチョウセンサザエ、クロチョウガイ等であるが、これが採貝漁業の中心となり、シャコガイ漁業は衰退しつつあることを示している。しかしながらその他の貝類も図4や表6に示し、前述したように石垣市ではすでに漁獲高及び生産額でも減少傾向にある。

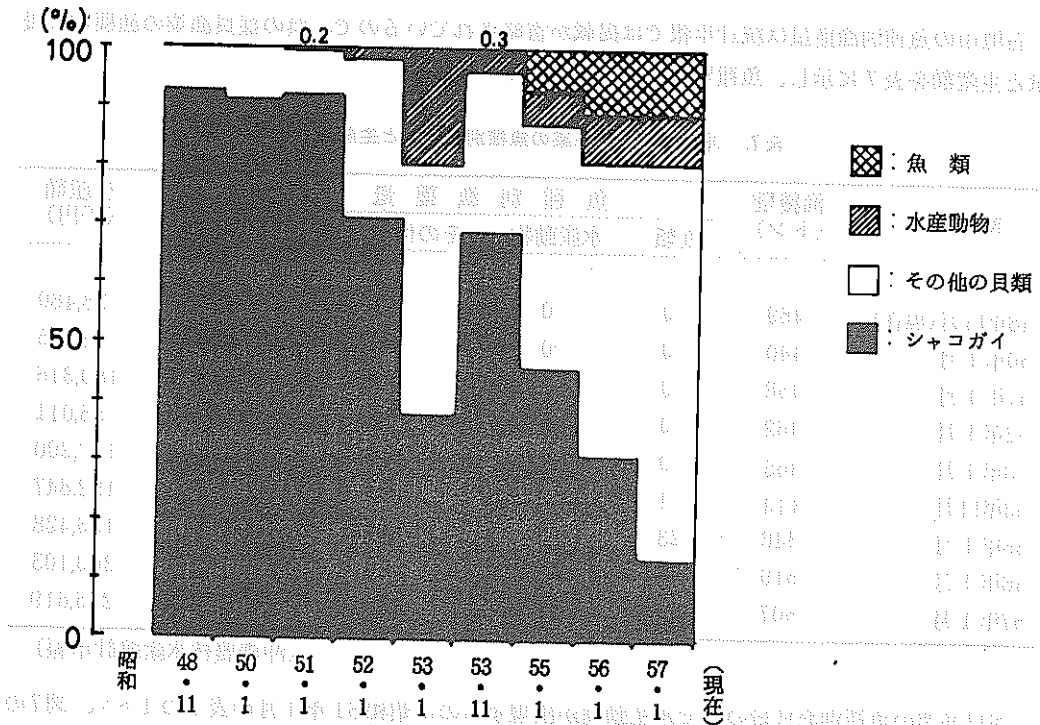


図7. 沖縄県の採貝漁業の魚種別漁獲量比率  
(沖縄農林水産統計年報より作成)

石垣市以外の地区でもその他の貝類の漁獲高が減少し始めた時、統計資料上は採貝漁業中に占める比率が低くなることである。このことは増加傾向を示している魚類及び水産動物への依存率が将来増々強くなっていくことが予測され、採貝漁業という漁業種の崩壊を意味すると共に一本釣、刺網、追い込み網、定置網等他の漁業種との競合や、次の資源の加速的な食いつぶしが懸念される。

八重山での採貝及びシャコガイ漁業の現状を現地資料及び聞き取り、標本船調査によって補足する。

八重山漁業協同組合の西表亭参事の提供情報：

(イ) 採貝漁業者は現在登野城地区では9隻である。小浜島でも一部シャコガイをとっている。

採業期間は夏期の晴天時で月に20～22日間出漁する。

(ロ) 漁場は小浜島から西表島であり悪天候時は白保へ移動する。漁獲対象物は同時にタコ、魚、タカセ貝等を採捕し、シャコガイ漁専業では苦しい。

(ハ) 漁獲物はほとんど地元消費で昭和55年以降は漁協での扱いはない。昭和57年に県漁連からの依頼で地元で集め那覇へ出荷したことがあった。

(ニ) 漁協では黒蝶貝は買い上げている。

(ホ) 6年前に自主規制案を出したが、漁業者・加工業者の反対で実現しなかった。

八重山支庁玉城正雄水産係長の提供資料では現在シャコガイを中心にとっている人は11名で、かつての主な採貝漁業者は19名である。

聞き取り調査では登野城地区の採貝漁業者はシャコガイ（ギーラ）の他にタカセガイ（ウナヴァ）、夜光貝（ヤクゲ）、黒蝶貝（ヒーク）、魚、エビ、タコ等もぐり漁でとれるものは何でも漁獲している。また最近では若年層を中心に夏は前述の漁業を行ない、冬は一本釣漁業者が漁に出れなくて魚価が高くなるので電灯もぐり漁（夜間に湖礁内へ船を出し、水中ライトを持って潜水し、活動の鈍った魚を漁獲する漁）をおこなっている。中年層は冬も夏も同様の漁業であるが、冬場のシャコガイの依存率は生産額の約25～30%程度であった。

小浜島での聞き取り調査では、夏は大半がシャコガイ中心の漁であり、冬は一部の人が継続し、残りは刺網漁に変わる。

現地資料及び聞き取り、標本船調査でもシャコガイ漁業専業では生計が立てられない現状があり、他魚種への依存が目立っている。

登野城地区での冬期電灯もぐり漁への移行は、他の漁業種類の今後の漁獲量との関係に注目する必要があると思われる。また同地区の採貝漁業は、沖縄の伝統的なもぐり漁からの派生であり、それが電灯もぐり漁へ移行していったことと、小浜島での刺網への移行との対比は漁村の成因を分析する上で興味を持たれる。

#### ⑥ シャコガイ漁場

図8に石西礁湖の地図を掲載したが、シャコガイ漁場、特にヒメジャコの場合はリーフの内側で穿孔基質となる琉球石灰岩やハマサンゴ等の塊状サンゴがあれば生息している。現在はとり残しを漁獲している状態であり、1ヶ所に多産するところは少なくなってしまった。西表島の網取湾や崎山湾、鳩間島、石垣島の白保、崎枝、川平、伊原間周辺も多かったが、主たる多産地帯は石西礁湖内であった。



図8 シャコガイ漁場  
●：以前の多産地